

教育 を 読む

河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

ぼくは飛行士である。あるとき飛行機が故障して砂漠の真真中に不時着した。夜明けに不思議な声を聞いた。「ヒツジの絵をかいて」それが星の王子さまだったのだ。

星の王子様は惑星 B-612 からやってきたのです。B-612 は小さな惑星で、小さな活火山が二つと、休火山がひとつと、バラが一輪ありました。バラはこまっしゃくれて生意気でしたけれども、本当は王子のことが好きなのです。渡り鳥たちがほかの星に移り住むのを見た王子は、バラに複雑な心を残して、ふるさとの星をあとに旅に出ました。

最初に行った星は、王様が一人で住んでいる星でした。家来はいません。王様は星の王子がきたので、家来ができたみたいそう喜びました。そして威厳をみせて威張りました。

次の星はうぬぼれ男の星でした。うぬぼれ男が王子に手をたたけといふので、王子が手をたたけとうぬぼれ男は喜び、帽子をとって満足そうにお辞儀をしました。何度もおなじくりかえしで、王子はあきて次の星に移りました。

今度は呑み助の星でした。呑み助

は酒瓶をいっぱい前にしてだまって坐っていました。王子が「なんでのむの」と聞くと「忘れたいからさ」と答えました。「なにを忘れるの」と聞くと「恥ずかしいのを」と答えました。「何が恥ずかしいの」と聞くと「酒を呑むのがさ」といいました。

次は実業屋の星でした。「五億一百万」と実業屋がいいました。「何が」「星の数だよ」「数えてどうするの」「星を持つんだよ」「持つとどうするの」「管理するんだよ。むずかしい仕事だがおれはちゃんとした男だからな」

次は点燈夫の星でした。小さな星に街灯が一本あり、点燈夫がいました。日暮れに街灯に点燈し、夜明けに灯を消すのです。点燈夫がこぼしました「昔はこの星がゆっくり回っていて、ゆっくり眠れたのにいまじゃスピードが速くなったんで寝る暇もない」といって点けたかと思うとすぐに消し、また点けたかと思うとすぐに消しをくりかえしていました。

次は地理学者の星です。地理学者「あなたの星のことを話してもらいたいね」「火山が3つあります。花もひとつあるんです」「わたしは花のこと

なんか書かんよ」「なぜ？ とても美しいんですよ」「花っていうものは、はかないものだからね」「はかないって？」「そのうち消えてなくなるっていう意味だよ」

最後の星は地球でした。キツネに出会いました。キツネが言いました「・・・秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目には見えないんだよ」「あなたが、あなたのバラの花をととてもたいせつに思っているのはね、そのバラの花のために、時間を無駄にしたからだよ」「めんどうみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなけりゃならないんだよ、バラの花との約束をね・・・」

すこし哀しいけれど美しい物語である。一読をおすすめする。

なお、著者サン＝テグジュペリは飛行機乗りであり、第2次世界大戦中に44歳の年齢で、無理やり頼み込んで空軍に入り、偵察飛行に行き行方不明となる。最近、彼のものらしい機体の一部が魚網に掛かったと報道されている。



◀『星の王子さま』
サン＝テグジュペリ作 内藤濯訳
岩波少年文庫
定価 本体 640 円＋税